

〔研究ノート〕

玄証本の転写図像をめぐる

昨秋当館で開催された特別展「清雅なる仏画」では、白描図像特有の観賞性に着目し、様々な仏を表現した描線の美をご覧頂くものでした。なかでも、平安時代末期に活躍した図像家・玄証(1146～1222)に関わる白描図像を数多く展示することが出来ました。玄証本図像には、多くの場合、玄証の落款や花押、「玄証本」「月上院」という裏書が認められ、「玄証自筆図像」「玄証収集図像」「玄証本の転写図像」の三種類あることが確認できます。本稿では、玄証本の転写図像に注目し、玄証本図像がどのように解釈されてきたのかを見ることで、白描図像の転写について考えてみたいと思います。

白描図像はその性格上、繰り返し写されるものであり、奥書が記され書写年代のわかるものでも、時代の判定には慎重な判断が求められます。例えば、東京国立博物館に所蔵される「先徳図像」は、奥書と花押から、玄証によって建久二年(1191)以降に筆写された自筆図像として知られますが、本来は「三国祖師影」といい、同じ図像を転写した作例が他にも伝わっています。久安六年(1150)の奥書を持つ大谷大学博物館本、鎌倉時代の転写本である醍醐寺本や龍華寺本、仁和寺には寛永十六年(1639)に転写された作例が所蔵されます。同じ図像を写したもので、描線にはそれぞれ違いがあり、転写した人物や時期が異なることが理解されます。このように、著名な図像ほど、繰り返し転写され、流布したことが窺えます。

玄証自筆図像にはこの他、「曼荼羅集」(大東急記念文庫蔵)、「十六善神図像」(東京国立博物館蔵)、「梵天火羅九曜図」(高山寺蔵)が挙げられます。これらの自筆本と他の玄証本を比較すると、図像の間に描線を介した興味深いつながりを見出すことが出来ます。すなわち、「梵天火羅九曜図」(図1)に見られる、最初に力強い肉身の輪郭線を誇張した描線が、大東急記念文庫の「四天王図像」や「執金剛神図像」(図2)に見られます。さらに、肥瘦の強い墨線で輪郭線を強調した図像が「鳥羽沙摩明王図像」(東京国立博物館蔵・図3)となります。また、こうした描線の特徴を意識しつつ、淡彩を施して整えた図像が、根津美術館の「毘沙門天図像」(図4)にあたると考えられます。ここに挙げた作例は、基準となる玄証自筆本と、整理された描線の特徴や紙質が異なり、玄証本の転写図像と見なされます。同様に「梵天火羅九曜図」に描かれた「羅睺星」の雲に見られる、伸びやかで柔らかな描線は「伽耶城毘沙門天図像」(個人蔵)の毘沙門天と眷属の足下に描かれた雲の描写に通じます。

また、「十六善神図像」(東京国立博物館蔵)に特徴的な、ふにやふにやとした柔らかな描線は、東京国立博物館に所蔵される「大元帥明王図像」(図5)「尊星王図像」、東京藝術大学所蔵の「不動明王図像」に、やや誇張した形で見出すことが出来るのです。

おそらく、こうした尊像をかたどる

特徴的な描線が、玄証の落款や花押と共に写され、後世に伝えられていったものと思われます。玄証自筆の図像、あるいは玄証が収集した図像は、十二世紀半ば頃から十三世紀始め頃のもので、玄証本図像が転写される過程で、当時の白描図像の様式とでも称すべき、描線の特徴が抽出され、強調されていったものと考えます。前に挙げた「毘沙門天図像」や「執金剛神図像」、「大元帥明王図像」等に見られる岩座の表現は、本来は、平安時代後半の作例と見られる、仁和寺所蔵「毘沙門天図像」(図6)のような描き方であったと思われる。

今ここに挙げました玄証本の転写図像は、「玄証本」と呼ばれているものの、玄証自筆、あるいは収集の図像ではありません。ただし、玄証本図像が成立した、十二世紀後半から十三世紀初め頃の白描図像の特徴を今に伝える重要な作例と理解できるのです。つまり、このような特色を持つ白描図像が、「玄証様」、すなわち、玄証に仮託して、平安時代に遡る由緒ある図像と解釈されていたのではないのでしょうか。このように考えますと、自筆本の特徴を備えつつも、全体の雰囲気異なる「阿弥陀尊召図」(文化庁蔵・図7)は、玄証様のお手本、「絵様」のような作例と位置づけられます。

さて、ここで重要なのが、今回取り上げました、「玄証本」という一つのまとまりが形成されたのは、他ならぬ玄証自身が、自らに関わる図像に自らの名前や花押を記したことに起因する点です。玄証は、同時代の図像家よりも、

手元にある図像に対するこだわりが非常に強かったことが窺えます。当時、玄証の周辺には、興然・実任・覚禅・定智といった僧侶や絵仏師が活躍していました。図像を介した繋がりも活発であったと思われます。こうした状況が、自分が所有する「個人の図像」という意識を生み出したのかもしれませんが。玄証個人の図像であるという点が、玄証本図像の最も大きな特色といえるでしょう。

以上のように、白描図像の転写には、単なる尊像の形を正しく写し伝えるだけでなく、原本が生み出された時代の描線の特徴までもが写し取られ、伝わる場合のあることが確認できました。特に玄証本はその傾向が顕著であり、だからこそ、数ある白描図像の中でも重要視された一群として、ひとときその存在感を示し続けているのではないのでしょうか。(古川攝一)

※図2は、『時代の美—五島美術館・大東急記念文庫の精華—第一部奈良・平安編』図録、五島美術館、2012年、図3・5は『東京国立博物館図版目録：仏画編』東京美術、1987年、その他の挿図は『清雅なる仏画—白描図像が生み出す美の世界—』図録、大和文華館、2012年より複写致しました。

図5



図6



図7

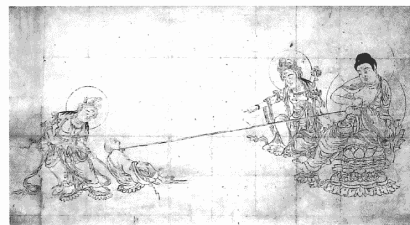


図1



図2



図3



図4

